

# 人間と AI を住み分ける

田上 蒼大（鹿児島高専 電気電子工学科 3 年）

## 1. はじめに

人工知能(AI)の発達は目覚ましく、その中でも ChatGPT のような、生成系 AI のそれは顕著である。AI が作曲、イラストなどの創作活動を担うことができるようになり、イラストや音楽の知識のない人でも簡単に創作活動ができるようになった。

しかし一方で、AI の台頭は様々な問題を発生している。例えば、

「AI の作った創作物」と「人の作った創作物」の線引きをどのように定めるか、という問題がある。2023 年現在では、生成系 AI が浸透し始めて間もないためか、これらを定めるルールや法律は決められていない場合が多いようである。

本論文では AI と人との創作物の中で発生した過去の問題を振り返って、なぜ問題が発生したのかを紐解いていく。また過去の問題から学んだことを生かし、これからの AI と人との関係の一端を示したい。

## 2. 問題から学ぶ

### 2.1 AI によって発生した問題

本論文では、実際に過去に発生した問題の「イラスト生成 AI」に関する事例を例に挙げて紹介する。

イラスト生成 AI は、過去に人間によって描かれたイラストを学習して新しいイラストを生成する。そのため、生成されるイラストはあたかも人が描いたようなものになる。イラストレーターが何十時間かけて描いた絵と、AI が 1 分程度で描きあげた絵が、一見、同じクオリティの制作物になったように見えることもあるようだ。それを見たイラストレーターは何を思うだろうか。当然やるせない気持ちになるだろう。それだけではない。無許可で他人のイラストを AI に学習させるような事態も発生した。結果的に、イラストレーターから「イラスト生成 AI」は多くの反感を買うこととなっているようだ。また同時にイラストを見る側にも抵抗を感じる人も現れ始めた。しかし問題はこれに留まらず、一昔前の SNS では AI イラストを自分が描いたかのように挙げられているものもあった。そのため、イラストを「見る」側の人間がイラストを描いたのは AI か、人かを見分けるのが非常に困難な場合も多かった。その影響により、主に SNS を使い仕事をしているイラストレーターのコメント欄には、AI イラストを嫌う人達から AI なのではないだろうか？このような事情により、AI イラストに対して嫌悪感を抱く人がイラストを「見る」側の人にも増え始めたのではないかと考えられる。

### 2.2 問題の原因と課題、その後の対応

それではなぜ今回前述したような事態に発展したのだろうか。この理由としては主に 3 つ考えられる。

まず 1 つ目は、生成系 AI を使う側の法律や常識に対する意識の低さだと考える。仮にもし AI を利用する人がしっかり著作物に関する扱いを正しく理解していれば、今回のような問題が発生する可能性はゼロではなかったとしても、ゼロに限りなく近かったであろう。ただ、実際にはその意識の低さによりこの問題は発生してしまった。つまりは、「メディアリテラシー」を正しく理解している人が少なかったのではないだろうか？当然メディアリテラシーは、AI が発展していく中、また SNS が発展していく中で必要不可欠な要素といえる。そのため政府は、「メディアリテラシー」をしっかり普及させなければならないと著者は感じた。

次に 2 つ目の理由は、生成系 AI を作成した会社がしっかりと AI の面倒を見なかったことだ。AI の面倒を見るとは実際どのようなことだろうか。主な例としては ChatGPT の開発元である Open AI 社は生成系 AI がユーザーに対して「不利益、損害を与えない安全な AI を作る」というような憲章を掲げている。このように生成系 AI を作成する会社は、AI が作成したのに対してしっかりと責任を取るべきであり、AI が完成した後も利用者やその他の人に危害を加えることがないか観察する必要があると考える。

最後に 3 つ目の理由は、当時は生成系 AI が始めてあまり期間が立っていなかったため、AI の生成物に対する政府、各 SNS 運用会社などの方針がしっかりと定まっていなかったためと考えられる。そのため、現在政府では生成系 AI に関する法律を制定する準備がなされている。

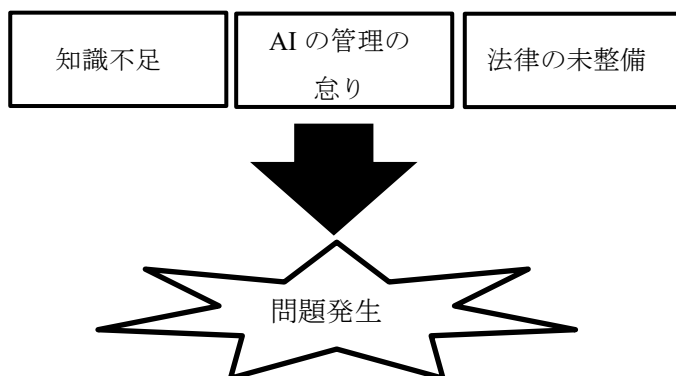


図 1 問題発生の原因

図1はAIの生成物に関する、AI開発者とユーザー双方の問題の原因を示す。いずれも著作物に対する知識が曖昧であったこと、AIの管理が徹底されていなかったこと、法律の整備が間に合っていないことが、というような様々な条件が絡み合ったことでこの問題は発生したと考えられる。

その後このAIイラストの問題は少しずつ改善されてきているようである。

生成系AIを「使う」「作る」側にはこれから少しずつではあるが、確実に法律の整備がなされて悪用されることは減少すると予想される。しかし今回注目したいのは、生成系AIによって描かれたイラストを「見る」また、イラストを「描く」人になされた対応だ。

### 2.3. 「住み分け」という考え方

イラストを「見る」・「描く」人になされた対応というのは、AIイラストと人間によって描かれたイラストを分けて見られる、というものだ。これはpixiv<sup>2)</sup>という主にイラストや漫画、小説を投稿するSNSでとられた対応だ。なぜこのような機能が追加されたかという2.1節で書いたように、AIイラストにあまりいい印象を持たない人も少なからず一定数は存在した。よって今回の新たな機能を取り入れたことによりpixivというアプリの中で、AIイラストを見たい人と、見たくない人との共存に成功したのだ。言い換えれば図2のようにpixivという一つの部屋の中での「住み分け」が可能になったということだ。この考え方が今回「人工知能と人間の共存する未来」のキーであると考えられる。

AIと人間が上手く住み分けるためにはまず何が必要だろうか。それは「AIのやっぴいことの上限」だと考える。ここまではAIに作業してもらって良い。しかしここからは必ず人の手で行う。またはその逆、というような明確な線引きをすることによって初めて、「AIと人間の住み分け」、すなわちAIと人間の共存が望めるのではないだろうか。

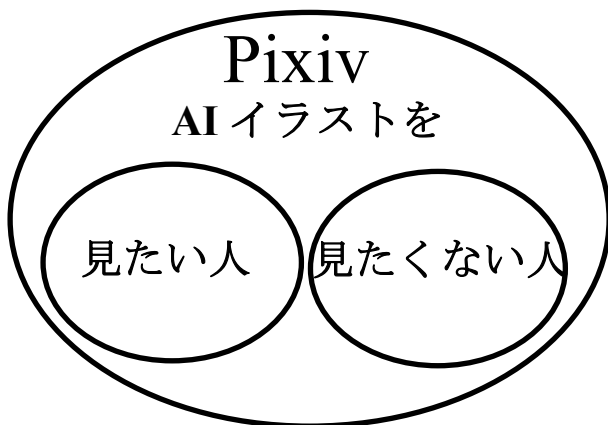


図2 住み分けのイメージ図

## 3. AIと人間を住み分ける

### 3.1 どこまでAIに任せるのか

AIにどこまで人間の仕事を任せるのか、と考えたときに必要な考え方は「AIにできること」と「できないこと」だ。今回はわかりやすくするために、飲食店での接客と、水道管の修理というような全く違った状況の作業を例に、AIと人間の作業の進め方を図3フローチャートに書き表し、考える。

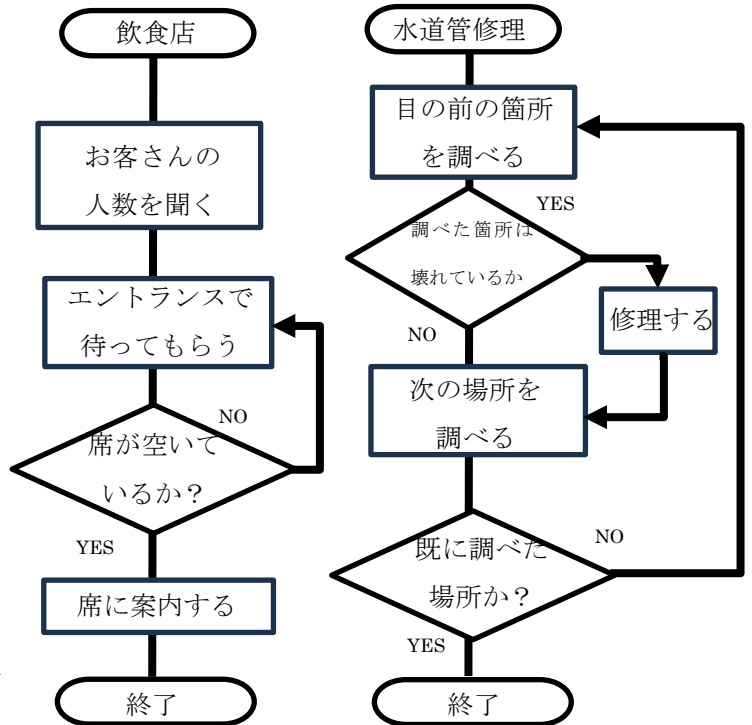


図3 仕事のフローチャート

現在では人件費削減の為、AIによって接客する店舗が増えてきているが、飲食店での接客の際にAIと人間の違いはあるだろうか? 上図のように接客を行う場合は、ほとんど毎回行う作業は同じで単調である。そのため、人間とAIの作業の仕方はそこまで大きくは変わらないかもしれない。

それでは、水道管の修理を行う場合はどうだろうか。修理を行うときはすべてが決まった作業ではなく、どこかにある壊れた部分を探さなければならない。また壊れ方は必ずしもAIが学習したものととは限らない、というような不確定な要素が非常に多い。そのため確実な判断をAIがその時に下せるのか分からない。よって上図のように一見単純な作業に見えるが、実際は複雑かつ手数が多い作業である。一方、人間が修理を行うとどうだろうか。慣れた職人はこれまでの経験に加えて、AIには使うことの難しい五感を用いて、作業を行う。そのため作業は確実であり、不確定な要素が多い中でも確実に仕事をこなすことができる。

表1は、AIと人間が行なうことができる作業の特徴を示す。二者の作業を比べると、AIにできること、できないことが見えてきた。例えば、経験や

五感という情報こそ、AI が最も不得意とする分野の一つである。

表 1 AI と人間の作業の違い

	飲食店の接客	水道管の修理
作業	単純	複雑
AI	AI が行なっても、 人間が行なっても 同じ	限られた情報の 中行う
人間		経験+五感を使 って行う

AI はこれまでの情報を基としてできる比較的単調な仕事を AI に担ってもらう。そうすることにより、人間に対する負担はかなり軽減され、より効率的な仕事につながると考えられる。

### 3.2 AI と人間の共存

単調な作業なら AI にもできると書いたが、もし 10 年後、20 年後と時代が進んでいくと、今よりも複雑である仕事も対応することができるかもしれない。そのような事態になってしまうと、ますます人間の仕事はなくなってしまうのではないのだろうか？と考えるのはある意味自然である。AI は人間の脅威となり得るだろうか？ここで、1 つ見てもらいたい調査結果がある。

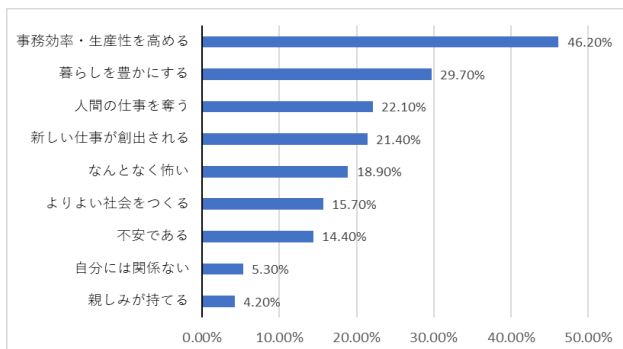


図 4 AI のイメージ<sup>3)</sup>

上図は過去に行われた当時(2023 年)の AI のイメージについてのアンケート調査(図 4)の報告書<sup>3)</sup>である。ここでは 22.1%の人が、AI が人間の仕事を奪うと答えている。また、なんとなく怖い、不安であると答える人もいる。ただ、忘れてはいけないのは AI を作成して運用しているのは、あくまでも「人間」なのである。そのため AI の進化は人によって制限することができる。よって、AI が人間の脅威になる可能性は、人間が無理な開発を行わない限りありえないと著者は考える。

ここで思い出して欲しいことがある。それは第 2 章で AI イラストの問題の時に露呈した AI に対しての今後の課題である。AI との共存に大きく関わってくる課題は、やはり 2 つ目と 3 つ目だろう。特に 3 つ目の問題点である生成系 AI に対する法律は、日本だけでなく世界中で共通のルールとなるもの

を、できるだけ早く制定されるべきだと著者は考える。当然 AI を作成する個人や企業・大学は法律やルールに則って開発することとなり、AI との共存という目標に一步近づけるのではないだろうか。

### 3.3 人間にとって仕事とは

最後の問いは『人間はいつか AI の成長を制御しなければならぬのか？』である。この問題を考える一番の契機は、先ほどから述べているように、AI に人間の仕事を全て奪われることに対する恐怖心にある。仕事がなくなったなら人間は楽になれるのではないかと AI なら考えるだろう。ただ AI に仕事を取られると人間はどうなってしまっただろうか？

人間の仕事について過去のアメリカの第三大統領であったトーマス・ジェファソンはこう答えている。

「幸せを与えてくれるのは、富でも豪華さでもなく、穏やかさと仕事である。」<sup>4)</sup>

ジェファソンによれば、人間は幸せになるために働いているのである。つまり、AI が人間の仕事を奪うことは一体どのようなことを示しているのか。それは、AI が人間から幸せを奪うということであると著者は考える。この状況は果たして AI と人間とが共存できている状態だと言えるだろうか。

## 4. まとめ

本論文では生成系 AI が引き起こした問題を例に取り上げて、AI のどのような点が問題であったのか、そしてどのように解決に向かったのかを紐解いてきた。また AI と人間の共存をテーマにし、過去に AI が引き起こした問題を踏まえ、これからの AI の在り方、また付き合い方について考えていった。

今回は AI によって発生した問題について紹介したが、本来 AI とは人間の暮らしを快適にするための道具である。しかし今回の場合は、AI を「使う側」、「作る側」に明確なルールが無かった為に問題が発生してしまった。今回の問題点を反省・究明しこれからの AI の発展に生かすことで、未来の AI は今よりずっと良くなるだろう。また、現在の AI に「できること、できないこと」、そして未来の AI に「して欲しいこと、して欲しくないこと」を明確にすることも先程の点と同じく、未来の AI の将来像に大きくつながるのではないかと。

AI と人間を住み分けさせることは、これから必ず必要になっていくだろう。また、これら境界線となるものは必ず 20 年後であろうが、100 年後であろうが大きく変わることはない巨大な「壁」となり、AI から人間の仕事、つまりは幸せを奪っていくこ

とから守ってくれるだろう。しかし逆に、この「壁」が壊れた時こそが、人間の最期なのかもしれない。

#### 参考文献

- 1) Open AI 社 HP  
<https://openai.com/>
- 2) Pixiv 社 HP  
<https://www.pixiv.net/>
- 3) アンケート調査にみる「生成 AI」のビジネス利用の実態と意向-NRI(野村総合研究所)  
[https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/knowledge/report/cc/2023/230613\\_1\\_1](https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/knowledge/report/cc/2023/230613_1_1)
- 4) 名言+Quotes HP  
<https://meigen-ijin.com/>